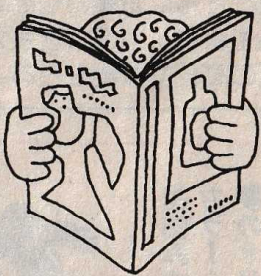


書齋の雑物を片付けていたら、古い切り抜きが出てきた。新聞らしいが、いつ、どこに書いたのか。パソコン中、原稿のファイルを検索して、どうやら判明。何とも懐かしく。



卒論のテーマにサン＝テグジュペリを選ぶかと考えていたことがある。その頃、友人に『星の王子さま』という本の解説をしてみせたら彼女は感動して、文字通り鳥肌が立っていた。

だが最初に取り組むのは大きな作家にしたほうがいいとアドヴァイスされて、自信はなかったけれど同じくらい好きなブルーストに決めた。

私が勤めている女子大学で学生に読みたいテキストを訊ねると、かならず『星の王子さま』がトップに上がる。あまりのことに私のほうがヘソを曲げて、『星の王子さま』以外で、と注文をつけたこともあった。

『ユリイカ』（青土社）七

### ベストセラー第3位

月号がサン＝テグジュペリの特集をしているのは今年が彼の生誕百年に当たるから。飛行士でもあったこの作家について、研究やエッセイが収められているし、彼や彼の妻つまり星の王子さまのバラの花（コンスエロ）の写真もなかなか興味深い。読んでいちばん興奮するのは、やはりサンテックス本人の文章だ。嵐の中を飛行した直後にガールフレンドに宛てて「羅針盤は理論的にはすばらしい。だが実際はかなりの風見鶏に似ているのだ」と書くなんて、すてきではないか。

昨年の調査では、全世界のベストセラー・ランキングで『星の王子さま』は第三位だそう。第一位が『聖書』で、第二位が『資本論』。今やサンテックスの顔はフランスの紙幣にもなっているし、この人気のほどはほとんど異常だ。

それにしても、作家の大きさというのはいったい何を物差しに測るのだろうか？

（佐々木 涼子）

初出：毎日新聞「マガジンラック」（二〇〇〇年七月末か八月始め）  
HP掲載：二〇二〇年一月二二日